

若者よ 福祉はオモシロイよ

来月に全国就職フェア 30代事業者ら主催

今、福祉の仕事がオモシロイ。来春卒業予定の学生たちにそう呼びかけ、全国各地の福祉法人を紹介する「就職フェア」が、8月に東京で開かれる。主催団体の代表は、北海道と大阪で福祉事業を立ち上げた30代の2人。「担い手不足」が強調されがちな業界だが、各地のユニークな実践を紹介することで、納得できる働き先として若者が福祉の仕事を選ぶきっかけにしてほしいと意気込む。

人材確保 十多彩さPR

主催するのは、大阪に事務局をおく一般社団法人「FACE to FUKUSHI」。若手の福祉人材の発掘や採用、育成に取り組んできた。イベント名は「全国FUKUSHI就職フェア」。8月2日に東京都港区赤坂の日本財団ビルで開く。対象は来春卒業予定の大学生や専門学校生らで、約300人の参加をめぐっている。

PO法人もある。背景には、若者が少ない地方で人材を確保する難しさがある。しかし単に労働力不足を埋めるためではなく、地域と密着した活動をする多彩な法人を紹介するのが狙い。「面白い仕事なら全国どこでも働きたい」「地元に戻って働きたい」という若者に、働き先の選択肢として福祉に目を向けてもらいたいという。当日はブースごとに個別に説明会をするほか、職員との交流会も開く。前日の8月1日には、同じ会場で福祉の人材確保戦略をテーマにしたフォーラムを開く。就職フェアは参加無料、フォーラムは参加2千円（懇親会2千円）。出展法人名などの詳細や申し込みは、HP (121.or.jp /fair2015/) へ。

給与・労働時間に悩み

若手従事者 前向き回答も

厚生労働省の統計では、介護分野の有効求人倍率（求職者1人に対する求人数）は昨年6月から2倍超えが続く。全国社会福祉協議会の中央福祉人材センターによると、求人数が増えていることに加え、景気回復の流れを受けて他の産業との人材獲得競争が激しくなっているという。

一方、厚労省によると、2011年3月の大学新卒者で3年以内に離職した人

の割合は、医療・福祉分野で38.8%で、全産業平均の32.4%より高かった。

「FACE to FUKUSHI」の前身の団体は、5年前に若手福祉従事者を対象にアンケートし、892人から回答を得た。「生涯この仕事を続けていきたいか」との問いには、「ぜひ」（21%）、「できれば」（65%）と前向きな回答が多かった。一方で「やや悩んでいる」「かなり悩んでいる」と答えた人が58%いた。悩んでいる内容について、給与の低さや労働時間の長さを挙げる人が多かった。（十河朋子）



「FACE to FUKUSHI」共同代表の大原裕介さん（左）と河内崇典さん（大阪府北区）

クリエイティブな仕事 超高齢化時代の鍵

「FACE to FUKUSHI」の共同代表を務める、社会福祉法人ゆうゆう（北海道当別町）理事長の大原裕介さん（35）と、NPO法人みらいず（大阪市）代表理事の河内崇典さん（38）。地元で障害者や高齢者を支える様々な事業を展開してきた2人に話を聞いた。

——地方で福祉事業に取り組む面白さは。

大原 僕は札幌出身。学生時代に当別町でボランティアセンターを作り、障がい児の一時預かり事業を始めた。不登校の子も認知症の人も来た。法人化して今春は10人の職員が入社した。

「消滅可能性都市」といわれる人口1万7千人ほどの当別町で、役場の（正職員）採用人数より多い。町の人に喜ばれるんですよ。人口減少や地域活性化と

地域で暮らす障害者や高齢者をどう支えるかと考えたとき、制度があることは重要ですが、制度が足りなければ制度外のサービスを作らばいい。そこに圧倒的な充実感がある。うちでは発達障害児や不登校児のための学習支援もしています。

——福祉にはきつい、汚い、危険（もしくは給料が安い）といった「3K」のイメージが付きまっています。

河内 排泄とか夜の泊まり介助とか、「平日の9時17時」以外の方が圧倒的に必要な仕事。なので、「頑張っている3K」だと思っています。必要なのは、世界の問題解決の先進国になりうる。その鍵となる福祉はクリエイティブな仕事だと思っています。